

CR編集委員代表就任にあたって

CR 新編集委員代表
上月正博



本誌は1992年に創刊され、30年以上の歴史を誇るわが国を代表するリハビリテーション（以下、リハ）医学雑誌である。編集委員代表として、初代米本恭三先生（1992～2007年）、二代目江藤文夫先生（2008～2024年）が情熱を注がれてこられた。私も本誌編集委員として2004年より参加し、それ以来、さまざまな特集や連載を企画し、編集会議で米本先生や江藤先生らに熱心にご指導いただいた（時に深夜にまで及んだ）。その結果として多くの企画案を本採用していただき、自らもリハ科医として大きく成長させていただいた。

当時はリハに関する成書はわずかで、しかも概念論に終始したものが大半であり、目の前のリハ対象患者に具体的なリハ処方をどう出すかに関して役立つものがほとんどなかった。そのような状況下で、本誌は、臨床の場に出合う頻度の高い障害や疾病を特集のテーマとして取り上げ、どのようにアプローチするかを図・表やカラー写真を多く取り入れながら具体的に示し、長い間、リハ科医にとって一番役に立つ書誌であり続けてきた。さらに、本誌の特集や連載が書籍化され、その信用性も高い。

今回、本誌の三代目の編集委員代表に就任するよう仰せつかり、身の引き締まる思いである。ただ、私には米本先生や江藤先生ほどの幅広い知識と豊富な経験はなく、同じように務められるか心細い限りであり、編集委員・企画委員の先生方には知識やアイデアを、そして読者には感想等のご協力をお願いする次第である。

この30年間で、リハ医学・医療とそれを取り巻く諸制度は実に目覚ましく進歩した。リハ対象疾患として、脳血管障害、運動器疾患、小児障害に加えて、高次脳機能障害、認知症、嚥下障害、がん、慢性心不全、肺高血圧症、末梢血管疾患、腎臓機能障害、肝臓機能障害等が加わった。その結果、実に多くの国民がリハの対象になったことで、事実上、リハが「国民のための標準医療」となった。

評価法も変わった。1965年のBI、1986年のFIMや歩容（動作解析）等、大雑把な生活機能が評価指標であった時代から、水飲みテスト、6分間歩行距離、SPPB、最高酸素摂取量、各臓器機能等、多くの詳細な機能指標が増え、さらにリハの素晴らしい効果が明らかになるにつれて、機能予後や生命予後の評価指標が加わった。

プログラムも変わった。特に内部障害リハでは、医学的な評価や適切な運動処方と運動療法に加えて、薬物療法・食事療法・患者教育・カウンセリング等をセットにした「包括的プログラム」になり、包括的リハ医療が実施されている。総合的な医療としての確固たる位置を占めるに至り、リハ科以外の臨床各科の医師の参加も目覚ましい。

研究手法やエビデンスも変わった。リハは個別医療でありランダム化比較試験は不

可能といわれていた時代から、ランダム化比較試験やメタ解析が当たり前に行われる時代が変わった。内部障害リハは「生活・運動機能の改善や生活の質の改善に加えて寿命の延長 (Adding Life to Years and Years to Life)」を達成できるものとしてリハの概念のパラダイムシフトが起こった。中でも、急性冠症候群、安定狭心症、慢性心不全、心臓手術後、跛行のある末梢動脈疾患、心臓移植後に対するリハは「クラス I、エビデンスレベル A、Minds 推奨グレード A、Minds エビデンス分類 I」と評価され、あらゆる治療の中でも「最高レベルの医療」であること等、リハの質の高さが続々と明らかになってきた。

制度的にも、介護保険制度、障害者自立支援法、後期高齢者医療保険制度、がん対策基本法、循環器病対策基本法の導入等、いずれもリハとのかかわりは大きく、医療と福祉におけるリハのニーズも拡大し続けている。

ここで、あらためて本誌の編集方針を挙げておくこととする。

- (1) 読者対象を、リハ医療に携わる医師、関連する臨床各科の医師、およびリハにかかわるすべての専門職スタッフとする。
- (2) 病院（急性期、回復期）、診療所、保健・福祉施設等、地域での取り組みを含めたリハ医療を主題とする。
- (3) 臨床の場で出会う頻度の多い障害や疾病を特集のテーマとして取り上げ、そこではできるだけ問題点を明確にし、どのようにアプローチするかを具体的に示し、実際の診療に役立つ工夫をする。
- (4) リハ医療を行う際の基本的知識を示し、理解を助けるために文章を簡潔にし、図・表を多く取り入れる。
- (5) 臨床医学全般の進歩に対応した先進的リハの取り組みを積極的に取り上げ、紹介する。
- (6) 1 人の患者を全人的、包括的にみるための広範な診療情報を提供するため、ケーススタディも掲載する。
- (7) 海外におけるリハ医学の現状や進歩を遅滞なく紹介する。

こうした方針は、基本的には 30 有余年の本誌の果たしてきた役割と創刊時以来の方針を踏襲したものである。

リハは既に「国民のための標準医療」となり、国民の ADL や QOL の維持・向上に欠かせないものになっている。今後ますます本誌が日常診療の場に常に置かれて、より多くの読者に役立つ実用臨床雑誌になり、リハ領域の人材育成にも寄与できるように力を注いでいく所存である。読者、編集委員、企画委員、医歯薬出版本誌担当者のすべての皆様に今後ますますのご支援をお願いする次第である。